

ファン・ゴッホに献じられたユートピア ―大石輝一の「アート・ガーデン」(兵庫県三田市広野)―

大阪大学大学院教授 園府寺 司

兵庫はファン・ゴッホと妙にゆかりのある土地である。『ゴッホ展 Vincent & Theo van Gogh』(2005年 札幌、神戸)のカタログでも紹介したように、芦屋の山本願彌太郎には第二次大戦期までファン・ゴッホの《向日葵》が所蔵されていたし、第一次大戦中には、ファン・ゴッホが名付け親となった甥のフィンセント・ファン・ゴッホ氏が神戸に1年間滞在している。

兵庫県三田市広野には、1960年代に画家大石輝一が作ったART GARDENという場所がある。当時、広野は緑豊かな田園地帯であり、大石は「南仏アルルの野に類似している」という理由で、この地に敬愛するファン・ゴッホと弟テオとその妻ヨハンナの名前を刻んだモニュメントを私財を投じて作った。除幕式にはオランダ総領事夫妻も出席し、朝日新聞社もこの式典に関わっている。その後も武者小路実篤から贈られた「ゴッホを想う詩碑」、柳宗悦七回忌に「民芸の父・柳宗悦先生の讃碑」、ロマン・ロラン生誕百年を記念する「ロマン・ロラン記念碑」などが次々に建てられた。大石はファン・ゴッホ氏宛の手紙で等身大のファン・ゴッホ像を造りたいと述べているし、複製美術館も建てたいと考えていたようだが、これらの計画は実現しなかった。

1972年に大石が亡くなってから、ART GARDENは急速に忘れられ、荒れるにまかされていたようだ。この場所は、ファン・ゴッホ「巡礼地」としての地位を得るには、何一つとしてファン・ゴッホの「聖遺物」を持たず、都市部から容易に足を運べるような場所でもなかったこともあって、忘却、荒廃の運命を辿ろうとしていたのも不思議ではない。ただ、幸いなことに、大石がファン・ゴッホ氏に送っていた手紙や資料、写真がファン・ゴッホ美術館にまとまった形で保存されていた。アムステルダムの「聖地」に保存されていた情報のおかげで、忘却に歯止めをかけることができたのである。地元にも保存の動きはあり、ボランティアなどによる整備も行われている。

文化財や歴史資料は約半世紀後の対処でその運命が左右される。ART GARDENはまさにその半世紀後の岐路にあると言ってよい。三田市広野はまだ緑豊かな地域だが、近隣には工業団地も建ち始めている。慎ましいながらも、日本におけるファン・ゴッホ受容の1頁として保存されるべきものとして、ここにご紹介しておきたい。